

JGSS における調査員の訪問記録の分析

保田 時男

(大阪商業大学総合経営学部)

An Analysis of Visiting Records in Japanese General Social Surveys

Tokio YASUDA

Faculty of Business Administration

Osaka University of Commerce

In this paper, I analyze the visiting records of Japanese General Social Surveys (JGSS) to examine typical visiting patterns. It is very important to control interviewers' visits in household interview surveys. In large-scale social surveys, however, direct control of visits is almost impossible. Therefore, it is necessary to use the visiting records as an indirect means. Moreover, the visiting records are effective to maintain and improve response rates of social surveys in the future. Results of the present study clarified the following three points. First, although many interviewers made multiple attempts to contact target subjects, the majority of visits has been completed within one or two weeks. Second, many interviewers visited target subjects on Saturday, Sunday, or National holiday. Third, interviewers typically visited target subjects at similar time frame although the visiting records of all interviewers showed that visiting time was diverse.

Key Words: JGSS, interviewers, large-scale survey

本稿は、JGSS (Japanese General Social Surveys) における調査員の訪問記録を分析し、調査員の典型的な訪問パターンを探索する。個別訪問調査において調査員の訪問行動を制御することは非常に重要であるが、大規模社会調査では、調査員の行動を直接的に制御することはほぼ不可能である。そのため、間接的な手段として訪問記録を活用することが必要になる。また、訪問記録は、将来の調査の回収率を維持・向上するために有効である。分析の結果、以下の3点が明らかになった。第1に、調査員はおおむね粘り強い訪問を行っているが、大半の訪問は1~2週間の短期に集中している。第2に、調査員は休日(土・日・祝)を特に重視した訪問を行っている。第3に、訪問時間はまんべんなく分布しているが、同じ調査員は同じような時間に繰り返し訪問する。

キーワード : JGSS, 調査員, 大規模調査

1. 目的

本稿の目的は、大規模社会調査 JGSS (Japanese General Social Surveys) における訪問日時等の記録を分析し、調査員の基本的な訪問パターンを探索することである。このような分析は、将来的な回収率の維持・向上、および回収率が下がった場合の原因の究明に役立つ。JGSS では、2005 年調査から調査員が調査対象者を訪問した日時をコーディングし、データとして保存している。JGSS のような全国規模の社会調査ではフィールドワークを調査会社に委託することが一般的なので、調査員の行動を直接に把握し、その行動を適切に制御することは難しい。訪問記録の分析は、その困難を補うための簡便で効果的な手段である。

本稿のアウトラインは以下のとおりである。第 2 節では、訪問記録という形で調査員の行動を把握することの重要性を確認した上で、JGSS における訪問記録フォーマットの設計について説明をする。第 3 節では、JGSS-2006 の訪問記録の分析結果を示す。個別の訪問のタイミング（訪問時期・訪問曜日・訪問時間）の分布、およびそれによる訪問結果（接触成功率・協力獲得率・訪問継続率）の差異を分析し、最後に前後の訪問を考慮した訪問パターンについて分析する。第 4 節では、これらの分析結果をまとめ、将来的な調査員の制御方法について考察する。

なお、訪問記録は JGSS-2005 と JGSS-2006 でデータ化されているが、その傾向は多くの点で共通なので、本稿では JGSS-2006 の分析結果を中心的に示し、JGSS-2005 の分析結果は Appendix に図表を示すことにする。JGSS-2005 と JGSS-2006 の訪問パターンの違いについては、保田ほか (2008) で回収率との関連を中心に分析結果を示している。

2. 訪問記録のデータ化

2.1 大規模調査における訪問記録の意義

面接調査や留置調査など調査員が個別訪問を行う調査では、調査企画者が調査員の訪問行動を制御することが非常に重要となる。首尾よく調査協力を得るためには、調査員が適切な日時に訪問を行い、調査対象者を適切に説得しなければならないからである。そのため、社会調査の実践的なテキストでは、調査期間中に各調査員から中間報告を受け、適切な指示をフィードバックすることが推奨されている（たとえば、井上ほか (1995)）。

ところが、大規模な全国調査では、その役割は調査会社に委託されることが一般的なので、調査企画者は調査員の訪問の仕方やその困難について具体的な情報を得ないまま調査を終えてしまう。長期的に見れば、それは調査企画者の感覚をフィールドワークの現場から乖離させる危険をはらんでいる。そのため、調査企画者はたとえ間接的にであっても調査員がどのような訪問行動を行ったのかを積極的に把握するように努めることが求められる。

本稿で取り上げる JGSS においても、実査のフィールドワークは調査会社に委託をしているので、上の事情が当てはまる。JGSS は、現在、大阪商業大学 JGSS 研究センター（旧比較地域研究所 JGSS 部門）が東京大学社会科学研究所を主な協力機関として 2 年に 1 度のペースで実施している全国規模の総合的社会調査である。1 回の調査の計画標本サイズが 8,000 (JGSS-2006 の場合) という大規模調査であり、個別訪問を行う（面接調査と留置調査を併用する）ので、調査企画者が調査員の訪問行動を直接に把握・制御することは不可能である。そこで、JGSS-2005 以降は、調査員の訪問記録をデータ化し、その行動の把握に努めている。

訪問日時の記録は、調査員の行動を事後的に把握するためのもっとも基本的な資料となる。地域が狭い範囲に限定されている調査の場合には、調査期間は数日以内にまとめられることが多いが、大規模な全国調査ではそれぞれの地区・調査員の都合が多様になるので、調査期間は 1 か月以上の長期間に設定されることが一般的である。JGSS-2006 の場合、正規の調査期間は 2006 年 10 月 3 日～12 月 3 日に設定された（一部、例外的に 12 月 4 日以降に及ぶ訪問もある）。この 2 か月の中で調査員がいつどの調査対象者を訪問したのかを、訪問記録から知ることができる。

また、それぞれの訪問日時だけでなく、その結果を合わせて記録することも重要である。すなわち、

このフォーマットでは、それぞれの訪問について、訪問日時を分単位で記入することを求めている。およその時間（××時××分頃）で記入しているので、2時0分や2時30分など、きりのよい時間に記録が集中する傾向があり、この点は分析の際にやや注意が必要である。

また、訪問日時に加えて、訪問の結果を捉えるために、それぞれの訪問で「話をした人」の記入を求めている。調査対象者本人と話をした場合には接触に成功したもの（図1のパターンA, B）とみなす。また、本人以外の家族と接触できた場合には、後の訪問行動に影響する可能性があるため、記録することとしている。いずれとも話をできなかった場合が不在である。厳密には、複数回答で本人と家族の両方に接触した場合を捕捉することもできるが、最初に玄関に出てきたのが家族であっても、その場ですぐに本人に会えたのであれば、家族との接触を記録する意味はあまりないので、簡便な単一回答としている。また、調査対象者に接触できた（本人と話をした）場合に、協力が得られたかどうか（図1のパターンAなのかBなのか）は、最終的に調査票が回収できているかどうかで判別できる。また、接触できなかった場合に、接触を断念したのか訪問を継続したのか（図1のパターンCなのかDなのか）は、次の訪問が記録されているかどうかで判別できる。このように、この記録フォーマットで必要十分な情報を得ることができる。

なお、訪問の記録は10回までとし、それを超える記録は不要とした。これは、これまでのJGSSにおける訪問回数の記録から10回を超える可能性が1%程度しかなかったため、便宜的に10回で打ち切ることとした。例外的に多くの回数を訪問したケースは、データからは抜け落ちている。

また、JGSSには留置調査が含まれているので、調査票の回収のために調査員は再訪問を行うが、調査対象者に接触して協力を取り付けるためのプロセスを捉えることが目的なので、回収のための再訪問は除外し、「対象者本人に会えるまでの訪問」のみを記録するように求めている。回収のための再訪問が誤記入されることはままあるが、データ・クリーニングによって、そのような訪問（対象者本人に会えた後の再訪問）は削除している。

なお、訪問日時と合わせて、調査を完了した日付（時間は含まない）を記録している。また、面接調査票の2ページ目（表紙の裏）では、欠票（回収不能）となった対象について、図3のように、調査不能と決定した日時、対象者の家の種類（一戸建て、集合住宅）、調査不能の理由・具体的な状況を記録している。これらも訪問記録と合わせて訪問の結果を把握するための有効な情報となる。

3. 訪問記録の分析結果

3.1 訪問時期

ここからは、JGSS-2006の訪問記録の分析結果を示す。3.1～3.3は、1回の訪問を1ケースとするデータ（ $n=22,370$ ）について、訪問時期、訪問曜日、訪問時間の分布とその訪問結果を分析している⁽¹⁾。3.4は、前後の訪問との関連に焦点を当て1人の調査対象者に対する訪問系列データを分析している。

訪問時期の分析結果から見ていこう。図4は、訪問時期が調査開始日から何週目にあたるかについて、全訪問の分布を示している。JGSS-2006の正規の調査期間は10月3日～12月3日なので、第1週は10月3～9日、第2週は10月10～16日といった具合である。調査終了日の12月3日は第9週の6日目にあたるので、第10週以降の訪問は特殊な事情による訪問であり（調査対象者が特にその日を希望したなど）、ほとんどの訪問は正規の期間に終了している。

調査期間の中頃の第3～5週（10月17日～11月6日）におよそ半数の訪問が集中しており、調査期間開始当初の2週間の訪問が少ないことが意外である。JGSS-2005においては、Appendixの図A-1のとおり調査開始当初に訪問が集中しているので、これは一般的な傾向ではないものと思われる。その理由は定かではないが、熟練の調査員は複数の調査をかけもちすることがあるので、他の調査の期間と重なりが生じた可能性がある。

次に、訪問結果を示す3つの指標（接触成功率、協力獲得率、訪問継続率）と訪問時期の関連を分析する。3つの指標を算出するためには、各訪問の結果を図1のA～Dに分類しなければならない。操作的には、その訪問が最後の訪問でない場合は「D 訪問継続」とした。一方、それが最後の訪問の

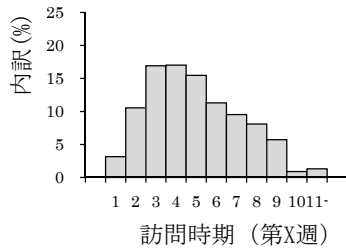


図4 訪問時期の分布

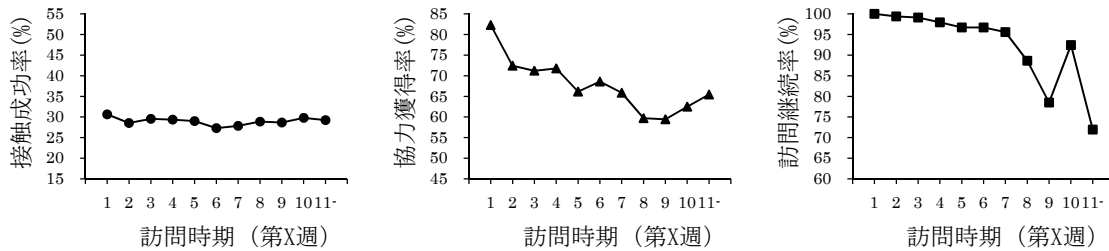


図5 訪問時期別の訪問結果

場合には、調査が完了していれば「A 協力」とし、拒否を理由とした回収不能であれば「B 拒否」に、一時不在を理由とした回収不能であれば「C 接触断念」に分類した⁽²⁾。

図5は、訪問結果を示す3つの指標（接触成功率、協力獲得率、訪問継続率）が訪問時期によってどのように変動するかを示している。接触成功率はまったく変動しないといってよい。時期の遅い訪問ほど接触しにくい対象者が残り、値が下がるようにも思われるが、そうはならないようである。この結果は、保田ほか（2008）の似たような分析の結果（訪問回数が5回以上にならない限り、接触成功率は初回と変わらない）と合致する。

一方で、接触後の協力獲得率は時期が遅いほど値が下がる傾向にある。この結果が、純粋に訪問時期の問題性を示すのか、なかなか接触できなかった調査対象者が非協力的であることを示すのかは明確ではない。しかし、後の3.4での分析結果を見る限り、多くの調査員は1~2週間程度の短期間にほとんどの訪問を集中させているので、純粋に訪問時期が遅いことに問題があるものと推察される。調査依頼状の送付から訪問まで間が空いている可能性がある。なお、第10週以降で、やや値が上昇しているのは、特殊な約束を取り付けた訪問が含まれるためであろう。

訪問継続率は第7週まで95%以上の高い水準を維持するが、第8週以降下降する。調査員は、調査期間の最後の2週間程度で訪問の打ち切りを検討するようである。ただし、それでも最終調査期間の第9週まで80%程度の継続率を示しており、調査員は粘り強く訪問を続けているといってよい。第10週目の値が上昇しているのは、やはり調査期間外の特異な約束があるものと予想される。

なお、これらの分析から「訪問時期を操作すれば訪問結果が改善する」と読み取ることは慎重でなければならない。分析対象の訪問には、初回の訪問も2回目以降の訪問も含まれている。また、飛び込みの訪問も（少数ではあるものの）予約を取り付けた訪問も含まれている。訪問時期はさまざまな要因で必然的にその時期に定まっている可能性が高い。あるいは、モチベーションの高い調査員ほど早い時期に訪問しており、その結果として調査対象者の協力を得やすいという可能性もある。この場合、訪問時期と協力獲得率の関係は見せかけで意味がないことになる。後で分析する訪問曜日や訪問時間についても同様のことは考えられるが、訪問時期は特に容易に操作できないものなので、あえて注意を喚起しておく。

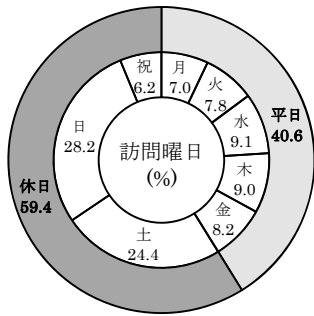


図 6 訪問曜日の分布

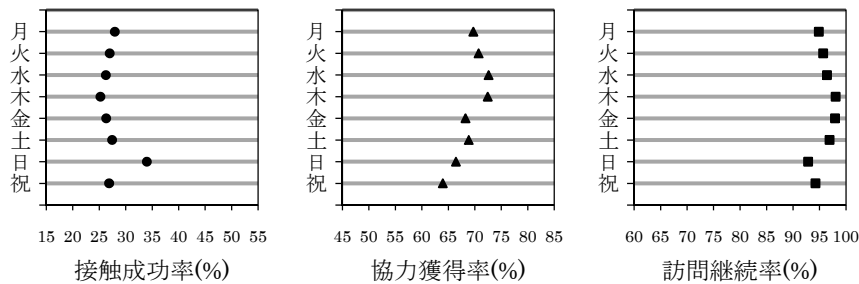


図 7 訪問曜日別の訪問結果

3.2 訪問曜日

次に、訪問曜日について分析した結果を示す。図 6 は全訪問の訪問曜日の分布である。祝日は別カテゴリーとして集計した。一見してわかるように、土・日の訪問が非常に多く、他の曜日の 3 倍程度の頻度である。祝日の訪問についても、正規の調査期間に占める祝日が 3 日間しかないことを考えれば、割合が高いといえる。休日の訪問が全訪問の約 6 割を占めている。

一般的な予想として、特に調査対象者が勤め人である場合には、休日の訪問は望ましいものと考えられるが、実際の訪問結果はどうであろうか。訪問曜日別に 3 指標を算出すると、図 7 のようになった⁽³⁾。

まず、接触成功率については日曜日の訪問が他より 10% 弱、値が高い。しかし、同じ休日でも土曜日や祝日は他の曜日と変わらない水準である。次に、協力獲得率については、どちらかといえば平日よりも日曜日や祝日は値が低い。その差は 5% 程度で大きなものではないが、少なくとも休日の方が協力を得やすいということはなさそうである。訪問継続率については明確な特徴が見られ、日曜日（あるいは祝日）に訪問を打ち切ることが多い。逆に、日曜日の前の木～土曜日には訪問を打ち切らない傾向がある。

田辺（2003）は、東京都の 8 市区で行った調査を事例として訪問曜日による接触成功率の違いを検討しているが、その結果は JGSS-2006 の場合と大きく異なっている。月曜日の接触成功率が低く、木・金曜日の場合に高いことが示されている。また、性別や年齢層によって、曜日の影響が異なることも示唆されている。

この先行研究を踏まえて、訪問曜日と訪問結果の関連についてもう少し検討してみよう。ただし、ここでの検討では、分析対象が分割されサイズが小さくなるため、月～金曜日の訪問は「平日」にまとめ、祝日は分析対象外とする。つまり、訪問の大多数を占める土・日曜日と平日の違いについて特に注目する。

まず、田辺の研究事例は東京都内の調査であったため、都市部の特徴を表している可能性がある。そこで、JGSS-2006 の訪問記録についても、市郡規模別（大都市・その他の市・郡部）に訪問曜日の影響の違いを確認してみた。図 8 はその結果であるが、市郡規模が異なる場合でも訪問曜日の影響は

ほぼ同様であることが読み取れる。市郡規模にかかわらず、日曜日は接触成功率が高く、協力獲得率および訪問継続率がやや低い。

次に、性別・年齢層によって訪問曜日の影響が異なるかどうかを確認する。サンプル・サイズの都合で、年齢層は20～39歳、40～59歳、60歳以上の3区分とした。図9のとおり、日曜日の訪問継続率が低いことが全体に共通であることを除けば、訪問曜日の影響の仕方はかなり異なっている。日曜日の接触成功率が高いのは、20～39歳、40～59歳の男性および40～59歳の女性に限られる。これは、勤め人の多いグループに対応するものと思われる。また、協力獲得率と曜日の関連にもばらつきが見られ、日曜日の方が値が高いグループもあれば低いグループもある。JGSS-2005についても同様の分析を行うと、あまり一貫した結果が得られなかった。訪問曜日と協力の得やすさの関係は、あまり固定的なものではないと考えた方がよさそうである。祝日の位置などによって変動するものなのかもしれない。

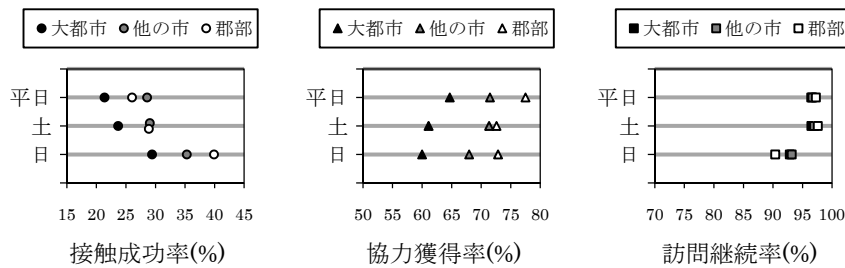


図8 訪問曜日別の訪問結果（市郡規模別）

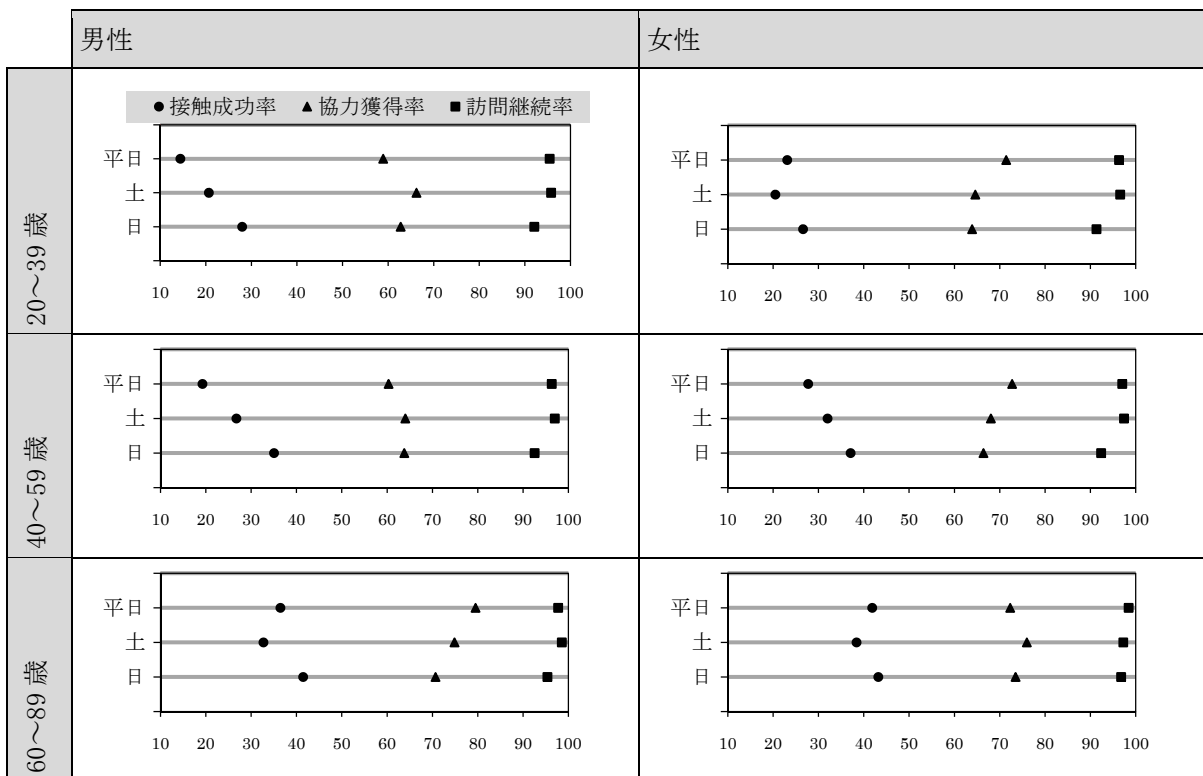


図9 訪問曜日別の訪問結果（性別・年齢層別）

3.3 訪問時間

調査員は、1日のうちのどの時間帯に訪問を行っているのか。図10は訪問時間を30分ごとに区切り（たとえば、9時のカテゴリーは8時46分～9時15分、9時半のカテゴリーは9時16分～9時45分）、その分布を示したものである。訪問は、およそ10～19時頃に行われており、午前中に11時頃を中心とした大きな山がある。昼食時の12時30分頃に谷があり、午後は15時頃を中心としたなだらかな山となっている。

図11は、訪問時間による訪問結果の違いを示している（この図では訪問の少ない早朝と夜間は除外した）。接触成功率と協力獲得率についてはぶれが大きく、またJGSS-2005の結果（図A-6）と必ずしも一致しない。唯一はっきりとした傾向は、19時以降の遅い時間帯では協力獲得率が低いということである。また、訪問継続率についても、夜は値が下がる。夜の訪問でも会えなかったときには、訪問の継続を断念する傾向があるようである。

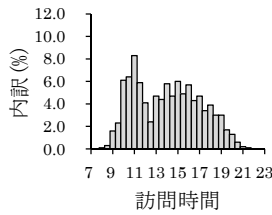


図10 訪問時間の分布

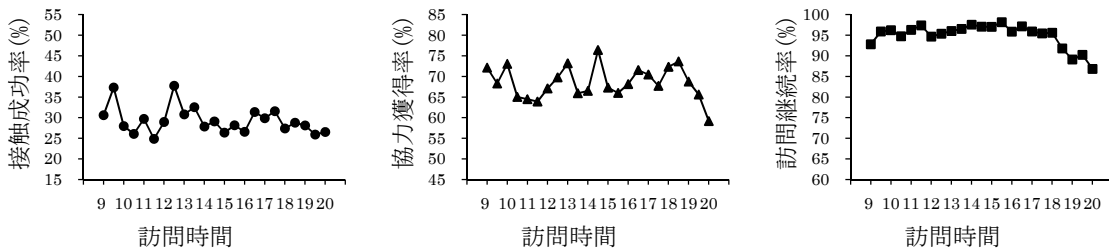


図11 訪問時間別の訪問結果

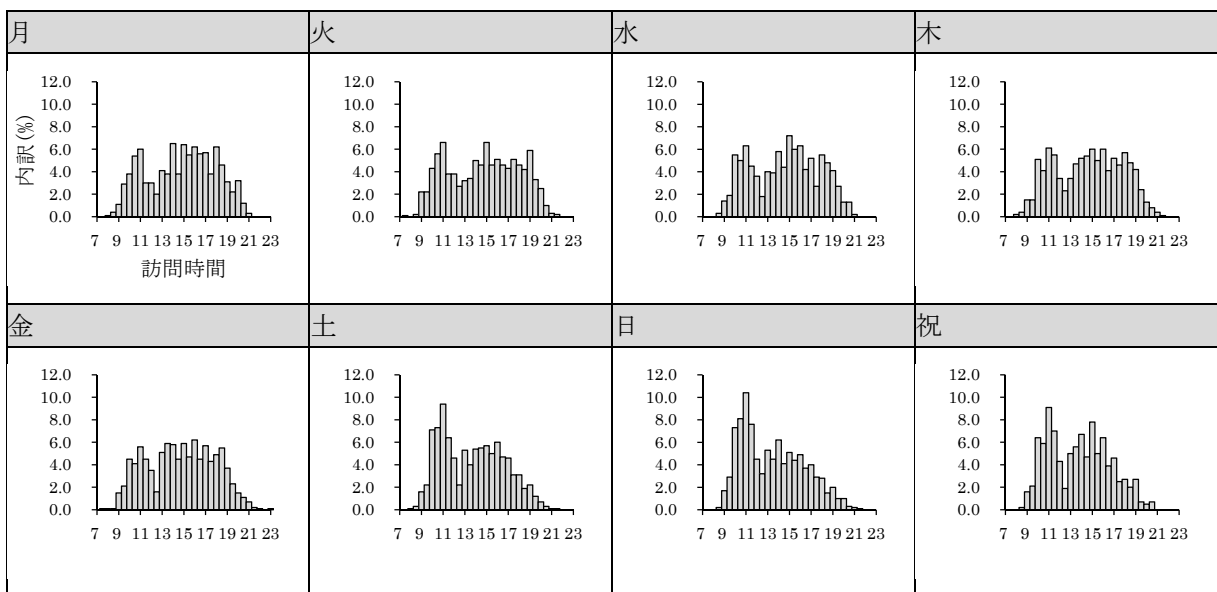


図12 訪問時間の分布（曜日別）

訪問時間の分布を曜日別に確認してみると、平日と休日（土・日・祝）で訪問時間に若干の違いがあることがわかる（図 12）。休日は、午前中の訪問への集中が顕著であり、また平日よりも早く 17 時頃から訪問を切り上げている。3.2 で見たように、休日の訪問を偏重するだけでなく、訪問時間についても平日と休日を区別しており、調査員が休日をかなり特別視している様子がうかがえる。

3.4 訪問系列

最後に、同じ調査対象者に対する前後の訪問を考慮した訪問系列データについての基本的な分析結果を示そう。調査員は 1 人の調査対象者につき、およそ何回程度訪問を行っているのか。図 13 は訪問回数の内訳である。約 3 割の対象者について 1 回で訪問が完了しており、2 回目までに約半数が完了している。平均訪問回数は 2.87 回である。意外と少ないように思えるかもしれないが、裏を返せば、2 回訪問しても半数の調査対象者には接触すらできていないということである。

では、どのくらいの間を空けて 2 回目以降の訪問を行っているのか。同じ調査対象者に対する 2～10 回目の訪問について、1 つ前の訪問日との日数差を算出し、分布を整理したものが図 14 である。翌日の訪問がもっとも多く 3 割以上を占め、同日にもう一度訪問するケースは 1 割程度しかない。基本的に 1 日の訪問は 1 回のみで、1 週間以内にもう一度訪問するというパターンが多いようである。調査期間は 2 か月間と設定されているが、1 人の調査員は 1～2 週間の比較的短い期間にほとんどの訪問を完了している。

日数的には短い期間で訪問を完了しているが、時間帯にはバリエーションを持たせているのであろうか。同じ対象者に対する複数の訪問の時間幅（もっとも早い時間と遅い時間の差）を算出し、その分布を示したものが図 15 である。「2 回目までの訪問」のグラフでは、1 回目と 2 回目の訪問時間帯の差を表している。1～3 時間程度の時間幅しかない場合が多く、1 回目と同じような時間帯に 2 回目も

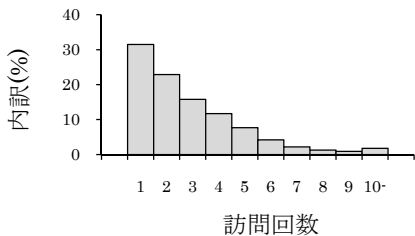


図 13 1 人の対象者あたりの訪問回数の分布

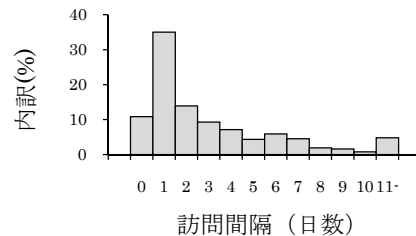


図 14 前の訪問との訪問間隔の分布

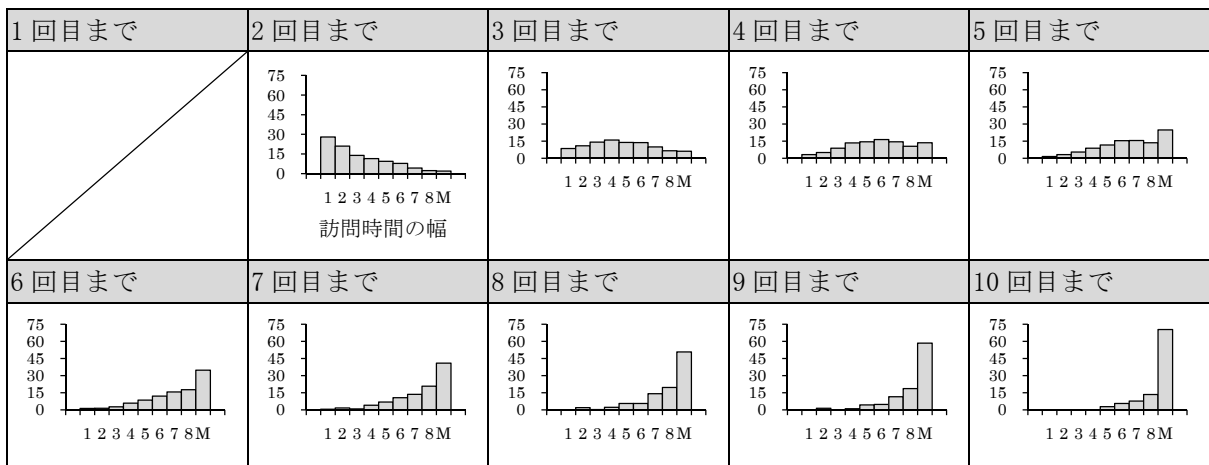


図 15 訪問時間の幅（X 時間以内、M は 8 時間より長いケース）

訪問していることがわかる。3 回目の訪問以降、徐々にその時間幅は大きくなり、4 回程度訪問して接触できなかった場合には、明確に異なる時間帯の訪問を試みている。

1 人の調査員が担当する複数の調査対象者への訪問記録を合わせて確認すると、およその標準的な行動パターンが推察できる。すべての調査対象者に対して2、3 日は同じような時間帯（おそらく調査員にとって都合のよい時間帯）での訪問を繰り返し、それでも接触できないまま残った対象者に対し、今度は一律に別の時間帯の訪問を何度か試みる、というパターンが多いようである。

4. まとめ

訪問記録の分析結果から、JGSS-2006 における調査員の訪問行動の特徴は以下のようにまとめることができる。

第1に、おおむね粘り強い訪問が行われていることが確認された。訪問は、調査期間の終わりまで行われており、訪問継続率は高く維持されている。何度か訪問して接触できなかった場合には、訪問時間を変える工夫をしている。ただし、日数的にはほとんどの訪問が1~2 週間程度の間に収められており、短期に集中的な訪問を行うことが基本となっているようである。

第2に、休日を特別視した訪問が目立つ。休日の訪問が6割を占め、また休日（特に日曜日）に接触できなかった場合に、訪問を打ち切るケースが多い。訪問時間帯も、休日は午前中の訪問が多いなど特別な傾向が見られた。

第3に、訪問時間帯は10~18 時頃で比較的にまんべんなく分布しているが、（特に休日の）11 時頃に訪問が多く、昼食時の12 時30 分ごろに少ないなど、若干の偏りが見られた。ただし、同じ調査員は（少なくとも最初の2、3 回は）同じような時間帯に訪問することが多く、ばらつきは少ない。

JGSS-2006 の回収率（公式回収率 59.8%）は、JGSS-2005 の回収率（50.5%）と比して大きく向上しており、昨今の調査環境を考えれば満足すべき水準である。本稿の分析結果からは、それが調査員の堅実な訪問に支えられていることが改めて明らかになったわけであるが、将来的に回収率を維持し、更なる向上をめざす方策について、若干の考察を行おう。

今回の分析の結果から、調査員が休日（土・日・祝）を非常に特別視した訪問行動を取っていることが明らかになったが、訪問結果の分析からは、休日を重視することの強い正当性は見出せなかった。唯一の確実なメリットは、日曜日の接触成功率が高いことのみであり、他の休日（土・祝）の接触成功率は平日と変わらない水準であった。また、日曜日や祝日の協力獲得率は、むしろ平日よりも低い可能性がある。何よりも問題なことは、日曜日に接触できなかった場合に訪問の継続を断念する傾向があることである。かつて筆者がフィールドワークに参加した際にも、「日曜日に会えなければあきらめるしかない」というセリフを何度か聞いたことがある。しかし、現代日本社会においては日曜日がそこまで特別なわけではないようである。この点に関しては、調査員の注意を喚起する必要が感じられた。

もう一点、今回の分析結果から気がかりなことは、調査員の訪問期間の幅が基本的に1~2 週間程度の短期間に集中しており、そこから漏れた者を継続的な訪問で補うというパターンが取られていることである。もちろん、接触できない調査対象者への訪問継続は粘り強く行われており、また、効率性の面からもこのようなパターンを問題視する理由はない。しかしながら、このパターンは最初の1~2 週間が過ぎれば、訪問する対象が激減するので、訪問を継続するモチベーションが下がりやすい構造を如実に表している。つまり、何らかのきっかけで粘り強い訪問を継続する意識がくじかれれば、最初の1~2 週間後の訪問をすべて取りやめる危険性ははらんでいる。調査内容が複雑であったJGSS-2003 のB 票は回収率が48.0%と低かったが、その中で拒否だけでなく一時不在による欠票も多かった（保田 2005）理由は、このような構造にあると考えられる。つまり、調査協力が得られる可能性が一定水準よりも低くなると、訪問を継続するモチベーションが維持できなくなり、1~2 週間のうちに義務的な訪問回数をこなした後は訪問を取りやめてしまう可能性が高くなる、と考えられる。この点は、むしろ調査企画者側の留意として、調査員が本来持っている粘り強さをくじくような調査設

計をしないように細心の注意を心がける必要がある。

大規模調査を効果的に継続するためには、今後も調査員の訪問行動を注視する必要がある。訪問記録の分析は、そのためのもっとも基礎的で確実な武器となるであろう。回収率の維持・向上のための方策を探索するとともに、万が一、回収率が下降した際には、その原因を探求できるように体制を整える必要がある。

[Acknowledgement]

日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学 JGSS 研究センター（文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点）が、東京大学社会科学研究所の協力をを受けて実施している研究プロジェクトである。東京大学社会科学研究所 SSJ データアーカイブがデータの配布を行っている。

[注]

- (1) 訪問記録は 10 回の訪問までしか記録していないので、10 回目の訪問の後に訪問が継続されたのかどうかは不明となる。そのため、本稿の分析では 10 回目の訪問を訪問結果の 3 指標（接触成功率・協力獲得率・訪問継続率）を算出するための分析対象から除外している。10 回目の訪問は 143 ケース（全訪問の 1%未満）である。
- (2) 本稿の分析では、訪問継続率を正確に把握するために、拒否および一時不在以外の理由（転居、病気など）により訪問を断念したケースを分析対象外としている。そのため、保田ほか（2008）とは分析対象ケースが異なる。
- (3) 図 7 のようなグラフは dot plot と呼ばれ、プロットの重なりによる混乱や錯覚が起りにくい表現方法と言われている。dot plot については、Robbins（2005）を参考にした。

[参考文献]

- Groves, Robert M., and Couper, Mick P., 1998, *Nonresponse in Household Interview Surveys*, John Wiley & Sons, Inc.
- 井上文夫・小野能文・井上和子・西垣悦代, 1995, 『よりよい社会調査をめざして』創元社.
- Robbins, Naomi B., 2005, *Creating More Effective Graphs*, John Wiley & Sons, Inc.
- 田辺俊介, 2003, 「面接調査の欠票理由の検討: 面接調査の回収率向上のための一提言」『社会学論考』24:1-27.
- 保田時男, 2005, 「回収率の改善のための調査員の制御についての考察」尾嶋史章編『現代日本におけるジェンダーと社会階層に関する総合的研究』（科研費成果報告書）pp.319-327.
- 保田時男・宍戸邦章・岩井紀子, 2008, 「大規模調査の回収率改善のための調査員の行動把握: JGSS における訪問記録の分析から」『理論と方法』23(2):129-136.

Appendix: JGSS-2005 の主な分析結果 (n=12,674)

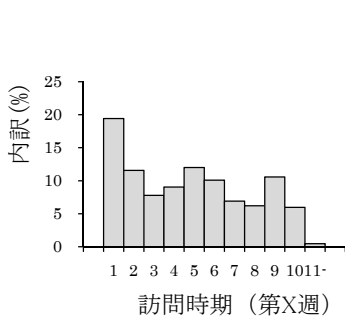


図 A-1 訪問時期の分布

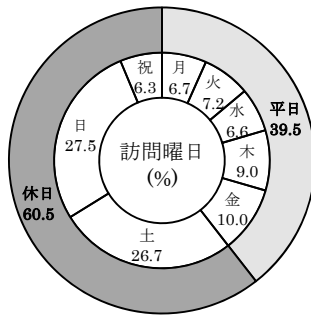


図 A-2 訪問曜日の分布

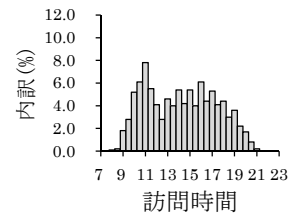


図 A-3 訪問時間の分布

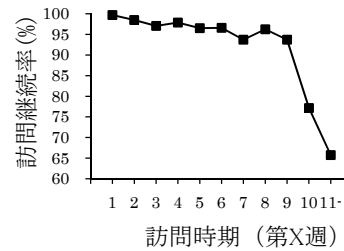
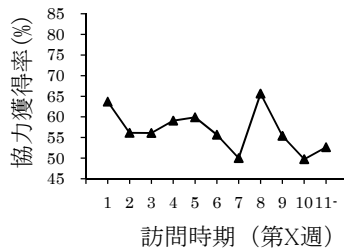
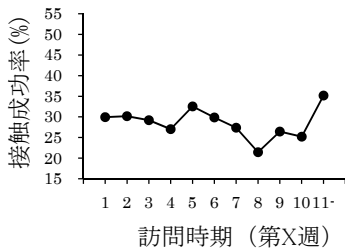


図 A-4 訪問時期別の訪問結果

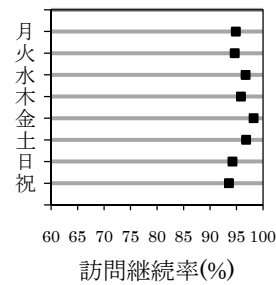
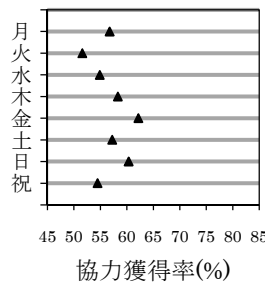
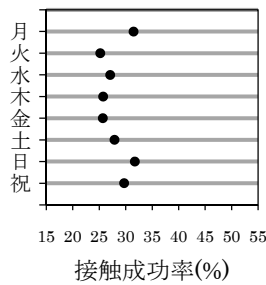


図 A-5 訪問曜日別の訪問結果

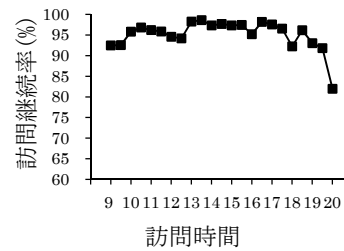
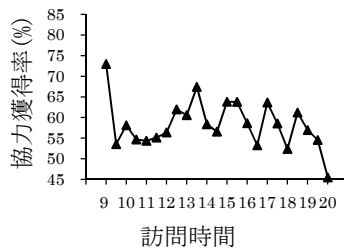
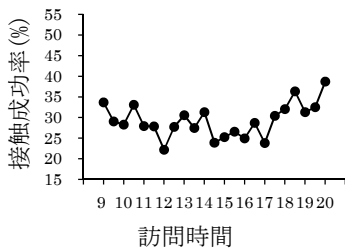


図 A-6 訪問時間別の訪問結果

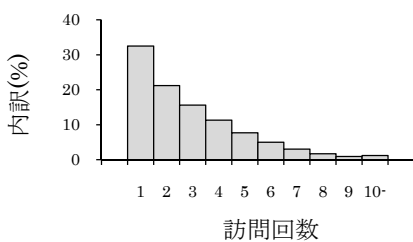


図 A-7 1人の対象者あたりの訪問回数の分布

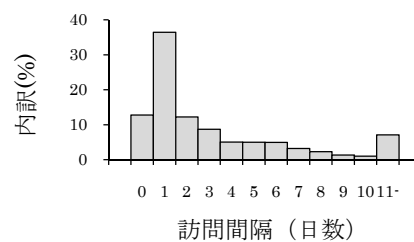


図 A-8 前の訪問との訪問間隔の分布